

ここからは宝石入りの帯留を紹介する。
図1-9-15は小粒ダイヤ入り金、プラチナ交り帯留。図1-9-3で紹介した帯留には小粒ダイヤが入ったものがあるが、これは、それとほぼ同様の実物。



図1-9-15
小粒ダイヤ入り金プラチナ交り帯留

図1-9-16は貝Mマークのある御木本真珠店の半円真珠の15金、七宝帯留。

御木本が装身具に七宝を取り入れたのは大正三年（1914）**だ**というから（「鏝のあゆみ**④**」）、この帯留もその頃のものであろう。



図1-9-16
半円真珠、七宝のK15帯留
御木本真珠店

前出の『婦人画報』の記事によると、まだ数は少なかつたが、サンゴ彫刻の帯留もあつたようだ。図1-9-19は白牡丹本店による初期のサンゴ彫刻帯留の売り出し広告。図1-9-20はその頃のものと思われる引つ掛け金具のサンゴ彫刻の帯留。



図1-9-18

ヒスイの帯留2種

上：母子図、下：葉模様図

上は金（K18）裏座、下は銀裏座



図1-9-17

ヒスイの帯留広告

白牡丹本店

大正3年6月『婦人世界』

「純日本式模様」とある。

ヒスイの帯留は大正前期には明治後期を凌ぐ人気アイテムとなった。大正五年（1916）10月の『婦人画報』に「帯留は翡翠全盛でございます。次いで金、銀、白金象嵌、まれに珊瑚をみます」という記事があるが、これからも当時のヒスイ人気の高さうかがえる。明治後期に日本でヒスイの帯留を用い始めた頃は、当時の清朝（中国）で使っていた装身具を転用したものが多かった。だが大正時代になると日本人好みの彫刻が増えたこともヒスイの需要の増加に拍車をかけた。

図1-9-17は、白牡丹本店のヒスイ帯留広告。図1-9-18はこの広告とは少し異なるが、大正前期頃のものと思われるヒスイ帯留2種。

以上のように、大正前期から後期は帯留が盛んに用いられた時期だが、すべての女性が帯留で身を飾ったかというところでもなく、あえてこの風潮に異を唱える女性たちもいた。装飾的な帯の上に、さらに帯留では装飾過多になると考えたのだろう。こうした女性たちは、大正時代の中頃から、金具の帯留はせずに帯締に凝り、池之端の道明や高田装束店の組紐の帯締を好んだという『風姿抄』⑦1。

羽織鎖

羽織とは着物の上に覆いかけて着る少し短めの、襟に折返しのある和服。

「羽織袴^{はかま}」という言い方があるように、羽織は元来は男性のものだったが、明治二十七、八年頃になると女性も外出時のおしゃれ防



図 1-9-20
サンゴ彫刻の帯留
桔梗^{ききょう}図
裏座は金
丸嘉共箱入り



図 1-9-19
サンゴ彫刻帯留広告
白牡丹本店
大正5年12月『演芸画報』
裏座は18金とある。

羽織鎖がさらに注目を集めたのは大正時代で、この時代に本格的な流行が始まり、昭和初期から戦時体制期まで多くの女性が用いた。

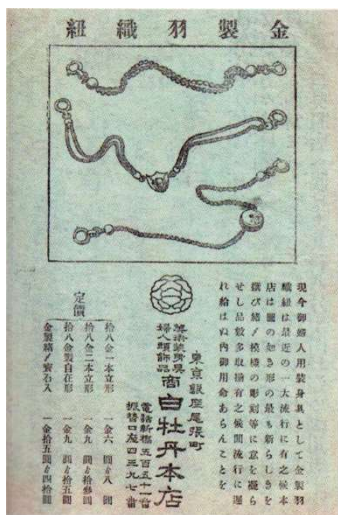


図 1-9-22
金製 (K18) 羽織鎖広告
白牡丹本店
明治 41 年 2 月『婦人世界』
鎖の中ほどの飾りを「緒締」と呼んでいる。

図 1-9-22 は、明治後期の白牡丹本店広告。広告文中に「現今御婦人用装身具として金製羽織紐は最近の一大流行」とあるところを見ると、貴金属店の宣伝というところを差し引いても、この新しい装身具は相当注目されていたようだ。



図 1-9-21
羽織と羽織鎖着用姿
『大正のきもの』より
女学校時代の親友同士の記念撮影。

寒用として黒紋付の羽織を着るようになった。特に目立つようになったのは大正時代になってからで、黒紋付以外にも、裾に模様を染めたモダンな絵羽織も用いられた(『大正のきもの』)。
羽織には前で結ぶ羽織紐(組紐)が付くが、明治四十年頃になると、この羽織紐に金鎖を用いる女性が増えた(ここではこれを「羽織鎖」と呼ぶ)。鎖だけのものもあれば、鎖の中ほどに金の飾りをつけたもの、その中に小さな宝石を嵌入したものなどがあつた。
図 1-9-21 は、羽織(絵羽織)姿の若い女性二人。羽織鎖は細くて分かりにくいのが、向って右側の女性の帯留の上に見えるのが羽織鎖。

図1-9-25から図1-9-28は実物の羽織鎖。この時代の羽織鎖の地金には金のもとの金にプラチナを一部使ったもの（プラチナ交り）がある。プラチナだけのものもあった。鎖中ほどの小さな飾りには好みの花や家紋がつけられた。

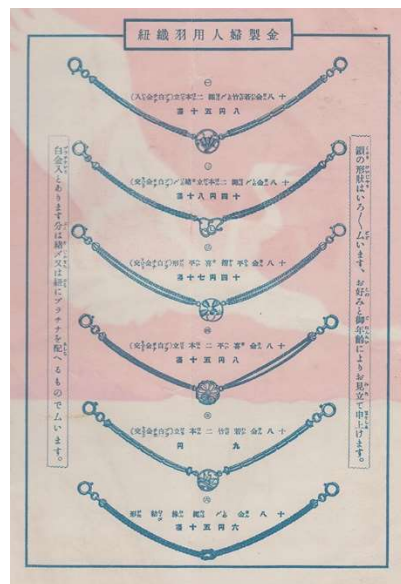


図 1-9-24
金製羽織鎖
三越呉服店
大正 8 年 1 月『三越』
上 2 本はプラチナ交り。



図 1-9-23
金製羽織鎖
尚美堂
大正 5 年 10 月『尚美堂時報』より
下の羽織鎖の飾り部には小粒真珠。

大正前期の広告には見当たらないが、有力店の商品カタログにはしばしば登場する。ささやかだが、女性にとっては大切な装身具だったようだ。

図1-9-23は尚美堂の商品カタログから、図1-9-24は三越の商品カタログから。デザインは明治時代のものとほとんど変わらない。



図 1-9-27
金 (K18) プラチナ交り羽織鎖
家紋 (蔓花菱) 飾り
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-9-26
金 (K18) プラチナ交り羽織鎖
小粒真珠入り桜図飾り
村松製
(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-9-25
金 (K18) 羽織鎖
菊図飾り



図 1-9-29

提げ物着用図

絵葉書より

帯留の右側に見える小さな飾り。

提げ物

帯まわりに華を添える提げ物は、おしやれで小粋な装身具。その発生は江戸時代後期にまで遡り、当初は胸元や帯に挿した「紙入れ」や「鏡入れ」の飾りとして始まった。

帯の提げ物は、この江戸のなごりがある和装小物が大正頃に形を変えて復活したもので昭和初期以降も用いられた。帯にストップパー状の金具を付けて提げたり、懐中時計に提げたり、また、小さながま口（口金のついた金入れ）につけて帯から提げることもあった。金、銀の提げ物の他に、飾り紐の先に象牙やサンゴの細工物をつけたものもあった。時代の特定はしにくいのが、ここでは貴金属製の提げ物を紹介する。図 1-9-29 は帯に提げ物をつけた大正前期の女性。図 1-9-30 は提げ物部分の拡大図。



図 1-9-28

プラチナ羽織鎖

家紋（鷺）飾り



図 1-9-32

銀製走馬灯形提げ物

走馬灯とは日本の伝統的照明器具である灯籠の一種で、中の影絵が回転しながら写る。



図 1-9-31

銀製ふくら雀形提げ物

ふくら雀とは丸々と太った愛らしい小雀のこと。

図 1-9-31 は、華鎖はなぐさり（装飾的な鎖）についた、銀のふくら雀の提げ物。紙入れや鏡入れに付いていたものを帯提げ用に転用したものかもしれない。

図 1-9-32 は、銀の走馬灯そうまとう（回り灯籠どろろう）の提げ物でストップパー金具付き。中には影絵に見立てた絵付き着色象牙が見える。



図 1-9-30

右図提げ物部分拡大図
鎖の先は、おそらく金製の飾りだろう。



図 1-9-34

銀製丸玉ヒスイ付き矢立形提げ物
墨つぼ部は開くように作られている。

(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)



図 1-9-33

銀製十手形提げ物

(天賞堂・伊藤廣司氏旧蔵品)

図 1-9-33 と図 1-9-34 は江戸情緒たつぷりの遊び心のあるミニチュア細工の銀の十手じって（江戸時代の捕り物に使う鉤かぎがある鉄の棒）の形の提げ物と、矢立やたて（墨つぼに筆筒がついた携帯用文房具）の形の提げ物。矢立には丸玉のヒスイが付いている。